

随 想

初 心 不 可 忘

大 谷 正 康*



私たちが何か新しい研究あるいは業務につくとき、一抹の不安はかくすべくもないが、大いなる希望に胸のときめくのを禁じえないものである。

いまはワンマン・カー時代でお目にかかる機会も少なくなつたが、陽春4月初め交通機関とくにバス、電車に乗ると、いかにも初々しく、目を輝かせ一心に先輩嬢から指導を受けている見習腕章のガイド嬢を見たものである。まことに真剣味溢れた態度で、乗客にとり一種の清涼剤でもある。一方先輩嬢はまず平均して世の荒波にもまれすぎてか、よからぬ私ども乗客のせいかな、えらくつつけんどんで、おこられているような錯覚さえおこす場合がある。わずか経験差数年にすぎないのに。

自分に例をとれば、俗にいう戦中派の学生としてほとんど勉強をしなかつた私が、鉄と鋼（昭9年、837頁、昭10年875頁）誌上に「熔鋼に於ける炭素と酸素の平衡」と題する的場先生の論文を拝読し、鉄鋼製錬の基礎反応に対する平衡論的研究に興味を持ち、先生の教えを乞うべく仙台の地に参上したのもついこの間のような気がする。しかし諺にいう光陰箭のごとく23年の才月は夢のごとく流れ去ってしまったが、自分の選んだ道は遅々として進まず、焦燥さえ感ずる。ただ一つ救いがあるとすればあの時の初心を片隅にとはいえ持ち続けていることかもしれない。

初心忘るべからず。聞き慣れた言葉であるが、実験実証派の常としてまずその出典を調べてみよう。

花鏡、世阿弥の文につぎの一文がある。

「当流に万能一徳の一句あり。初心不可忘。此句三ヶ條口伝在。是非初心不可忘。時々初心不可忘。老後初心不可忘。此三、能々口伝可為。」

ここにいう初心とは若い頃に学んだ芸や、その当時の力量、未熟さ、および時期時期での初めての経験を意味しているとの解説がついている。能について完全門外漢の筆者は、物事を思い立つたときの心はやる気持も含めるものと広義に解釈させてもらっている。

鉄鋼製錬の基礎反応に関する平衡論的研究は数多くの成果により、基盤が固まつたと見られるが、動力学的研究は緒についたばかりの現状である。その解明にはより高度の学問的水準、より広い分野からの協力を必要とするのは論を俟たないが、さらに重要な因子は研究者の研究に対する意欲ではないだら

* 東北大学選鉱製錬研究所 教授

うか。反応がおこるためには、何かが駆動力となつていなければならない。研究遂行上での駆動力は各研究者の意欲と考えている。最近マスコミに氾濫している「根性」とか「モーレツ社員」というのもこの辺の事情をいうのであろう。こういう言葉が語られるのは、裏を返せば一般にはそのような意欲に欠け、企業が社員教育に躍起となつているということであろう。私はこのような意欲低下の主因は「初心を忘れる」ことにあると考えている。現代の荒廃した世相の中に、忘れ難い初心など得られるはずがないとする向きもあろう。しかし新しい環境、新しい出来事に対して受ける新鮮な感覚は誰しも経験のあることである。問題はそのような感受性を急速に鈍化させる世相、すなわち「初心」を軽んずる風潮にあるのではなからうか。それが画一化主義、マイホーム主義にもつながっているように思える。この根源は何かということは現代文明の解析を伴うむずかしい課題であろうが、少なくとも私たちはこの際いま一度「初心」について味わう必要があるように思う。

世論の厳しい批判の中に立つ大学問題はその根源は深く、大学人の立場として文教政策などそれなりに意見はあるにしても、やはり「初心」が問われているという気がしてならない。大学のそれぞれの構成員が、初心忘れることなく、立場立場において大学のあり方を真剣に考え、真理を探求し、真理にもとづき自己を律してきたとするならば、今日の事態がおこつたであろうか。少なくとも私にとって深く考えさせられるところである。

一方鉄鋼界にとつても同じことがいえるのではないか。敗戦後の潰滅状態から、経営者も、労働者も各自がそれぞれの立場で、なんとかしなければの気概に燃えて立ち上がり、その間絶えず研究を重ね今日の地位を確保した。もしも各人が初心を忘れ、あるいは時を経て、ある時点での初心を忘れたとしたならば、今日の隆盛を見ることはなかつたであろう。

世界第3位の製鉄国となつたが、原料問題など前途必ずしも楽観を許さない。より一層の進歩、発展のためには製鉄に関連するすべての人の「初心不可忘」の総意の結集にかかつているのではなからうか。

「言うは易く、行ふは難し」は私自身よく知つており、このような文を草すること事体におこがましさを感じるが、自戒の意を含め、含蓄あるこの句をおもい、己が道を辿りたいと思う。

諸先輩の味わいのある随想には及ばないが、一文を記して責めを果たさせていただきます。

万能一徳の一句あり。初心不可忘。